

演題 4

**幕末の徳山藩医・四熊宗庵
の医療活動について**

○中 澤 淳¹， 亀田 一邦²

山口大学¹， 九州国際大学²

(第115回日本医史学会: 2014.5.31.)

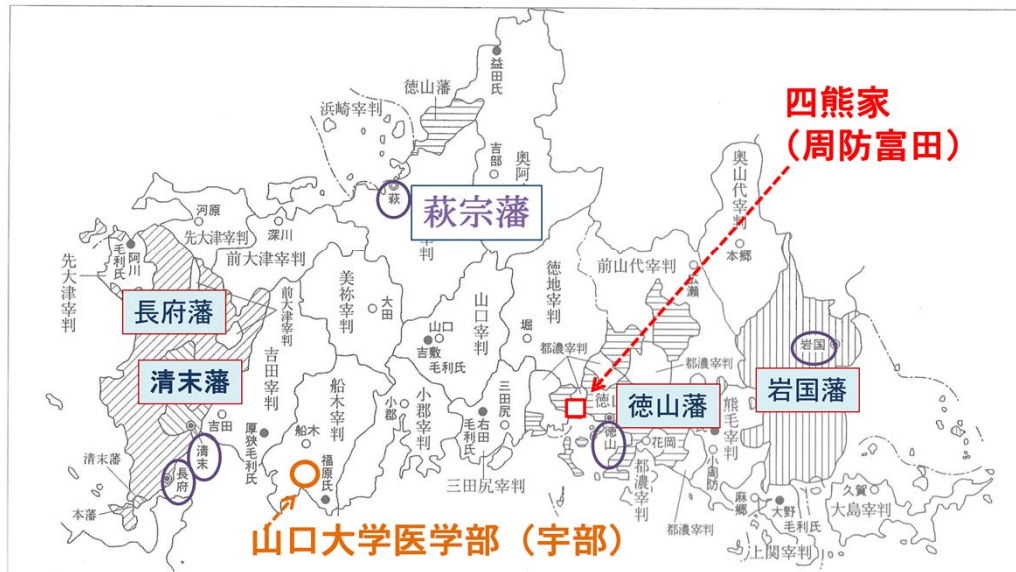
第115回日本医史学会 総会・学術大会発表

(演題4)「幕末の徳山藩医・四熊宗庵の医療活動について」

平成26(2014)年5月31日

於九州国立博物館 ミュージアムホール

萩宗藩および四支藩



石川辰美「防長歴史用語辞典」より

周防、長門二国を治める長州藩には、萩宗藩に加えて、長府、清末、徳山、岩国の4支藩がありました。

西洋医学を取り入れて医学教育を始めたのは、天保11年・1840年に萩に開設された医学所・好生館ですが、支藩の徳山藩でも同時期に藩校において漢方、蘭方兼修の医学教育をはじめています。

今回お話しする四熊宗庵の四熊家は、徳山藩領周防富田に16世紀から続く旧家で、宝暦の頃から「見学堂」という私塾を開設し、広く医学生を集め、嘉永の頃まで続きました。宗庵は四熊家の13代目に当たります。ちなみに山口大学医学部がある宇部は周防、長門の国境に位置しています。

四熊直方宗庵（1833-1908）

天保4(1833)年	誕生
嘉永4(1851)年	大坂に遊学 (藤澤東咳, 吉益掃部, 華岡南洋)
安政4(1857)年	周防富田にて内科・外科医開業
慶応元(1865)年	徳山藩士に採用
慶応2(1866)年	徳山第二病院総管に任命
明治元(1868)年	蝦夷地(箱館)戦争に従軍
明治4(1871)年	廃藩置県により病院勤務終了

四熊直方宗庵は18歳の時大坂に出て、5年間、漢学、漢方内科、漢方外科を学んだのち故郷で開業します。

長州藩は、文久3年の政変以降朝敵として攻撃されることになります。徳山藩は、幕府軍との戦闘を想定して、慶応2年に軍事病院・徳山病院を作ります。

宗庵はこれに先立って藩士に採用され、徳山第二病院の総管を命ぜられます。

慶応4年・明治元年の戊辰戦争は翌年箱館戦争に発展しますが、宗庵はこれに従軍します。

その後、明治4年には廃藩置県となり、宗庵の藩医の身分は終わります。

徳山病院

(慶応2年(1866)～明治4年(1871))

病院本営（福田寺）

遠藤春岱、山下順庵、長沼歡吾、林諒益、
三浦佐一、熊谷養伯、浅田杏伯 他町医5名

第一病院（久米村 当分下松）

惣管 増野松伯* 他町医7名

第二病院（南野）

惣管 四熊宗庵* 他町医7名

第三病院（戸田村）

惣管 佐伯鼎造* 他町医7名

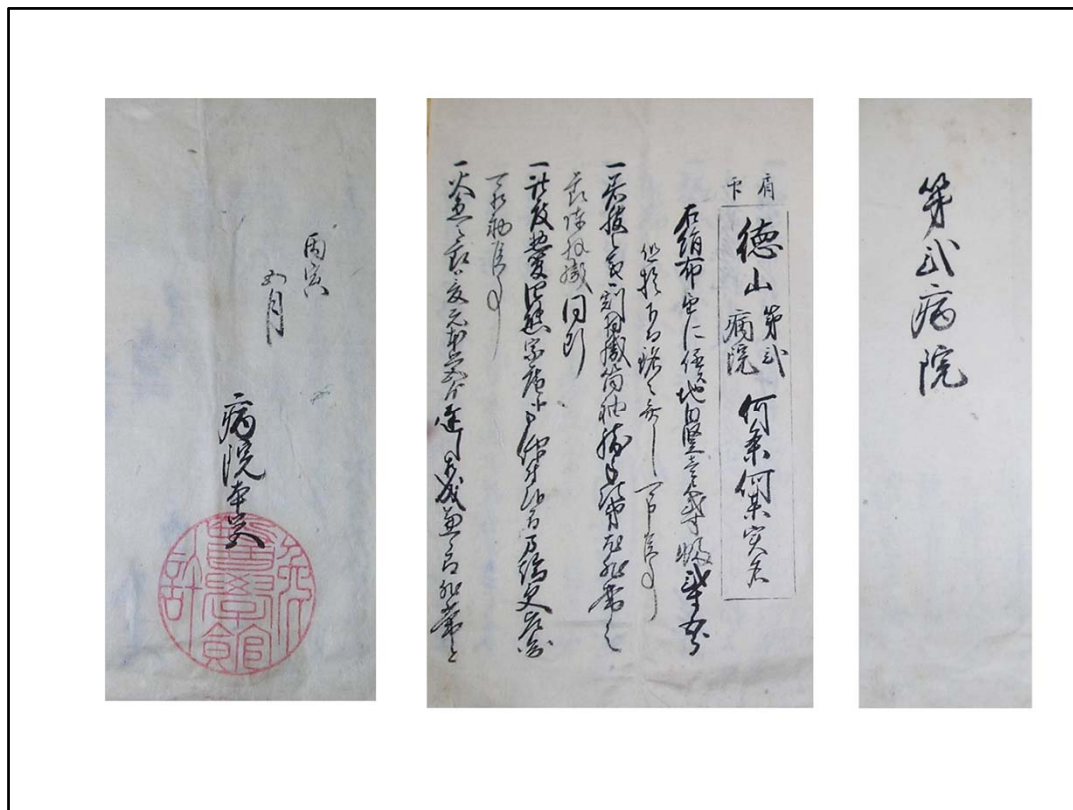
第四病院 第三病院と合院（富海村）町医4名

*華岡門人

徳山病院は本営が藩庁の近くにあり、7人の藩医が配置されました。

第一から第四病院、これは分院ですが、すべて山陽道沿いに設定され、
藩医1人に町医7名という構成になっています。

総管にはいずれも華岡塾出身の漢方外科医が当てられています。



これは第二病院の医師に対して病院本営から配られた文書の抜粋です。
 名札の肩印の規格から始まり、総管四熊宗庵の指図に従うように、など
 と細かく指示されています。

四熊直方宗庵(1833-1908)



(四熊家蔵)

これは奥州へ出陣するときに撮った写真で、右側はその後書き残した一行書です。

「身をいたし、力を尽くす」と覚悟のほどが伺われます。

四熊宗庵 蝦夷地(箱館)戦争従軍医活動

- 明治元年 9.11. 徳山藩より従軍の下命
(1868) 10.3. 三田尻出航（徳山藩献功隊、山崎隊、
萩宗藩整武隊 約1000名）
11.6. 青森着
- 明治2年 4.16.～5.12. 江差戦争
(1869) 4.29. 船中治療 患者を青森・松前へ
5.17 榎本軍降伏
5.21. 船中治療 患者を函館へ
6.1.～6.27 青森大病院において治療活動
6.28. 青森出航
7.2. 品川着 患者を東京府病院へ
7.16. 品川出航（患者5名同伴）
7.20. 三田尻着 患者を徳山病院本営へ

箱館戦争従軍の経過です。

明治元年9月に従軍命令が出て、10月には大勢の兵とともに海路青森まで進みます。

翌2年4月に戦争が再開され、5月17日には榎本軍が降伏します。この間宗庵は船中で傷病兵の治療にあたっています。

6月に入ってから青森で治療を続け、7月20日に傷病兵を船に乗せて東京経由で徳山へ帰着します。

四熊宗庵 蝦夷地(箱館)戦争療治記録 (明治2年)
--

4月17日	松前戦争	銃瘡治療	29人
4月20日	木古内戦争	銃瘡治療	6人
4月24日	二股戦争	銃瘡治療	26人
6月1日～27日	青森大病院	銃瘡治療	37人
合計			98人

宗庵の治療記録によりますと、松前戦争、木古内戦争、二股戦争で計61人の銃創治療をしており、戦後も青森で37人の治療にあたっています。

四熊宗庵の治療した戦傷者

(明治2年・箱館戦争)

種 類		人 数
銃砲 創	貫通	24
	留置	6
	擦過	4
刀 創		4
計		38

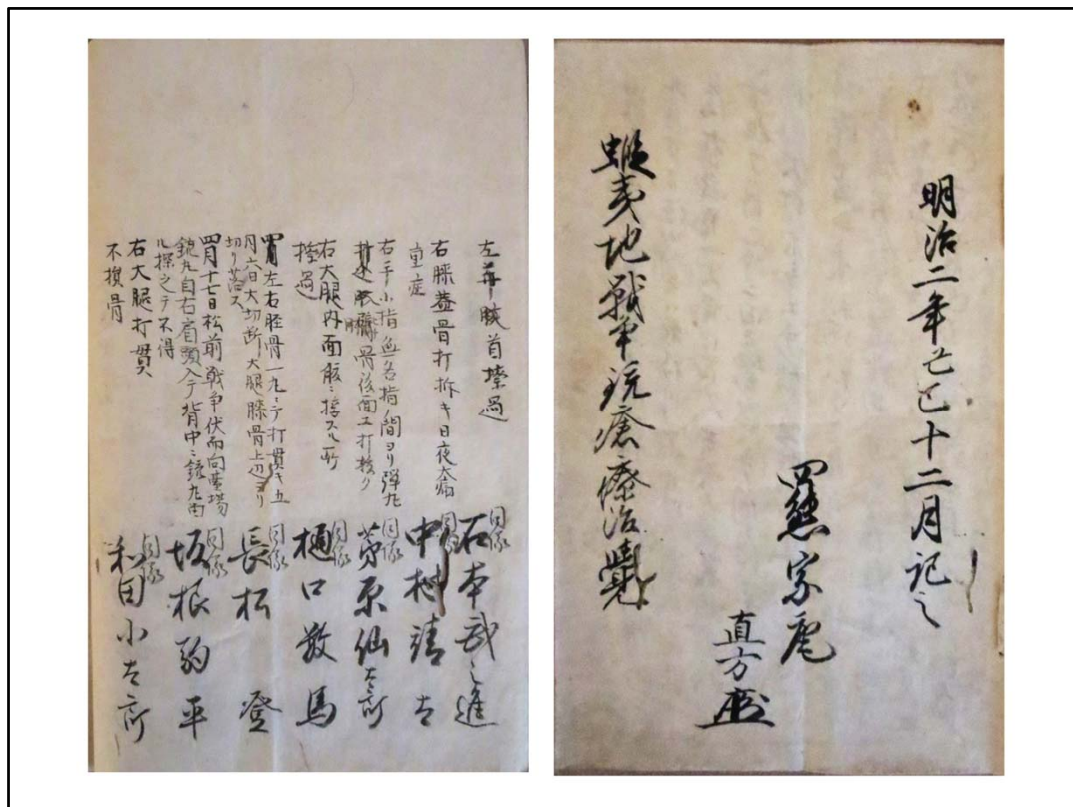
部 位	人 数
頭部	4
体幹部	9
四肢	25
計	38

重傷者 7
死亡者 4

戦傷者のほとんどは銃砲創で、貫通、留置、擦過傷があり、刀傷もあります。

傷害の部位はほとんどが四肢で、体幹部、頭部の順となっています。重傷者は様々な部位の貫通創をうけていて、死亡は4名です。

同時期の戦傷者の記録としては、関寛斎による「奥羽出張病院日記」がありますが、銃砲創の種類、部位、死亡率などはほぼ同じ傾向です。



これは藩庁へ提出した「蝦夷地戦争療治覚」の写しです。

この中に、「左右脛骨一丸にて打ち貫き五月六日大切断大腿膝骨上辺より切り落とす」とありますが、この長松登という人は9日後に亡くなったようで、青森の三内霊園にお墓があります。

このような手術が華岡流外科で行われたのかどうかよく分かりませんが、奥州出張病院では関寛斎が下肢切断術を行っています。

四熊直方宗庵(1833-1908)

明治4(1873)年 徳山病院勤務終了（廃藩置県）
明治6(1873)年 山口医院で医術考試受験
明治11(1878)年 山口県より開業医証書受領
明治16(1883)年 退隠
明治17(1884)年 内務省より内外科医術開業免状下付
明治23(1890)年 嫡子泰治医術開業
明治41(1908)年 逝去

明治になると山口県は他県に先駆けて、医学教育と医療、衛生管理などを一括して統括する組織として「医院」を置きます。そしてこの体制で、明治5年からは医術考試を開始します。

宗庵は明治6年4月にこれを受験しまして、山口県開業医証書を受け取っています。

中央政府でも明治9年に医術開業試験実施の通達を出しますが、宗庵に内務省の内外科医術開業免許状が下付されたのは明治17年3月でした。このとき宗庵は既に退隠を決めていまして、あとは四熊家14代泰治が医師開業免許を取得して同じ場所で開業をします。



周防富田土井 四熊家 (2013.3.28.撮影)

これは現在の四熊家です。

わら屋根の部分が母屋で、ここで宗庵は晩年得意の漢詩に没頭しました。また、築庭にも造詣が深く、屋敷の左側にある庭園は自分で設計したものです。

右側の長屋門のところは、昔私塾見学堂で教室に使われていたところ
です。

四熊宗庵は世の中が急速に変化していく中で、漢方医として旧世代の
代表的存在でしたが、医師会活動に参加することなく、後継者の発展
に望みを託して生涯を閉じた孤高の逸材であったと思います。

このような人物が地方にはまだ埋もれているのではないかと思います。

以上です。